AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2018.7) 平成29年度:19-22.

排便管理方法を検討した成人二分脊椎の2事例

日野岡 蘭子

排便管理方法を検討した成人二分脊椎の２事例

旭川医科大学病院　看護部
日野岡蘭子

＜症例１＞、40代女性。摘便と浣腸で管理していたが管理不十分で、下痢時の失禁と肛門周囲皮膚炎が長期化していた。坐骨部褥瘡からの骨髄炎を繰り返し長期間の抗生剤投与が下痢の要因であった。高度の肥満と下肢大切断から単独で便座に移動し排便行動ができないため、自立を考慮しストーマ造設とした。
＜症例２＞、30代女性。逆行性洗腸で管理していたが、週2~3回、1回の洗腸に4時間を要し、長時間便座に座る事で褥瘡が発生していた。なおかつ母親の介助が必要であり社会進出が困難であった。洗腸の時間短縮と自立を考慮しMACEを行った。

２症例に共通しているのは、おむつから脱却したいという意思と、それぞれの母親から自立を促されていたことである。症例１は便座での排便行為が取れないことから洗腸の選択肢はなく、自立にはストーマがQOLを向上させる唯一の手段と考えた。症例２は洗腸可能な状態が前提で、時間短縮がQOL向上に寄与した。

排便管理方法を検討した成人二分脊椎の2事例

旭川医科大学病院
看護部
日野岡蘭子

発表者：日野岡蘭子
開示すべきCOIはありません

事例1

40代女性
・便は硬めにコントロールし、摘便と浣腸で管理
・坐骨部の褥瘡の再発を繰り返し、骨髄炎のため長期に抗菌剤を投与
・抗菌剤による腸内細菌叢の変化および抗菌剤そのものへのアレルギー反応と思われた
・

背景

- 繰り返す褥瘡の要因は、自宅での生活状況にあった

段差のある浴室で這って移動せざるを得ない
→車いすのまま入れない
→導尿はトレイではなく自室で床に座って実施

・自宅のバリアフリー工事は資金面で困難
・両親から自立を促されていた

問題点と介入

問題点	介入	
抗菌剤長期投与による下痢の持続	骨髄炎であることから抗菌剤中止は困難 整腸剤の選択と止瀉薬の効果的な投与 腸内細菌を整える食事や補助食品	薬剤師 栄養士
下痢の持続による肛門周囲皮膚炎の増悪	便と皮膚を確実に遮断する →亜鉛化単軟膏と皮膚保護パウダー	
下痢時は排便行為のセルフケアが不可		

自宅での環境を再考：トイレで便座へ一人で移動し着衣の動作ができなければ自立はできない
車いす用のトレイでも困難
自宅のトイレは非バリアフリー

介入

便座に自力移動して排便行為ができない
高度の肥満と右下肢大切断
→今後自立しての生活が難しい

⇩

患者自身が危機感を持った
排便管理方法を根底から変えることはどうか？

ストーマ造設を提案：患者、両親と納得いくまで話しあう

結果

横行結腸単口式ストーマ造設

ストーマケアは車いす座位で行うことから、切断肢側に広い面積が確保できる

セルフケアの確実な実施が可能であることを考慮し右腹部に造設を依頼

ストーマケアは自立：積年の希望であった排便行為が自立した

下痢時でも皮膚トラブルの不安がなくなった

おむつからパッドへ→蒸れが解消

事例2

30代女性

・小学生時に逆行性洗腸での管理を開始後、母親の介助で継続していた

・現在まで同様の方法で継続、母親が全介助で実施している

・週2～3回の実施だが、翌日漏れることが多かった

背景

・洗腸に関する情報を得る機会がほとんどなかった
　→患者、母親とも疑問を感じていなかった

・診療科には定期受診を継続していたが、医師も洗腸の現状を知る機会はなくそのままとなっていた

⇩

洗腸用器具の新たな情報を求めて看護師へ連絡

話を聴いたところ、問題点が明確となった

問題点と介入

問題点	介入	
洗腸が自立できない 母親が将来に対して不安を表出 洗腸に3～4時間を要しており、坐骨部から大腿後面にかけて褥瘡を発症 洗腸に時間がかかりすぎるため、社会進出が困難 洗腸の日は外出できない 翌日も失禁があり、外出をためらう	泌尿器科主治医へ現状を報告し相談 MACEの適応について提案 泌尿器科カンファレンスでの適応検討を依頼 本人、母親へMACEの情報提供	主治医

排便行為の自立が目標

結果

MACE施行

洗腸行動が自立

時間短縮　→1回3～4時間から1時間程度

翌日の失禁はほぼ消失

→おむつからパッドへ

褥瘡は治癒

考察

2事例に共通していたこと

⇩

おむつから脱却したい

自立をしなければいけない

可能にするために何が必要かを本人と家族で徹底的に考えた

結論を急がせず、意思決定を待った

考察

事例1	事例2
便座への移動は自立できても、着衣を下げる、上げるなどの動作ができないため、トイレでの排便は難しい	便座への移動、着衣動作は自立できるトイレでの排便が可能
洗腸は選択肢にならない	母親の、将来自分が高齢化した時の不安が大きかった
排便行為の自立のためにはストーマが最良の選択肢	現在の問題は、洗腸の質
結果的にQOL向上につながった	MACEにより洗腸の大幅な時間短縮

・排便管理方法の選択は、各個人の背景を充分理解した上で、将来も見通しながら検討することが必要
・本人と家族が理解、納得するまで結論を急いではいけない
・ストーマのように代替法としての排泄管理方法へ変更する場合は、メリットがデメリットを上回ることが必要と考える

結語

☑ 成人の二分脊椎患者2名について排便管理方法の検討を行った
☑ 排便管理方法の選択は、各個人の背景を充分理解した上で、将来も見通しながら検討する
☑ 本人と家族が理解、納得するまで結論を急がず、意思決定を自身で行うことが重要
☑ 排便管理方法の変更により、自立できるという自信につながった
☑ 自身での意思決定を待ったことで、術後管理の受け入れと手技習得がスムーズになった